



第47回「おかねの作文」コンクール

お金から広がる感謝の輪

愛知県・名古屋市立東星中学校 2年 加藤 小百合

「福袋」を開けて、中身を取り出した。私は思わず言葉を失った。中に入っていたものは、明らかに売れ残りの商品と思われる、いらぬものばかりだったのだ。どんな物が入っているか、という期待が瞬時に押しつぶされたとき、祖母が声をかけた。

「どう？気に入ったものはあった？」

私は祖母の優しさを裏切れず「うん。」と嘘をついてしまった。この福袋は、祖母が買ってくれたものだったのだ。

中身が全くわからない雑貨の福袋。3,000円相当が1,000円とあり、その値段、お得感に心を奪われてしまった。1,000円という手頃な料金、何かいいものが入っているかもしれないという高揚感、そして、自分のお金を使うわけではない、という三つの思いが、祖母におねだりして買ってもらうという軽率な行動に至ってしまった。心苦しく、祖母への罪悪感が募った。

だがこの時は、まだお金の大切さやありがたさを身にしみて感じていなかったのだと思う。父親が毎晩遅くまで働くのは当たり前で、お給料が入ってくるのも当たり前。三大義務の一つである「勤労」は、私たちが学校に通うことと同じことだと思っていた。

そんな私に、お金の大切さやありがたさを感じさせてくれた出来事があった。それは、昨年参加したケーキ屋の「職場体験」だ。生地作りや、飾りつけなどをしたが、中でも一番緊張したのは、ロールケーキの盛り付けだった。出来上がった1本のロールケーキを箱の上に置くという一見簡単な作業であるが、「爪や指のあとを一つでもつけたら、そのロールケーキは売り物にはならないよ。」と説明を受けていた。売り物として完成の形にするためには、どれほどの材料と労力を使ったことだろう。パティシエは、常に立ち続け、動き回っている。様々なケーキを同時並行でつくるため、常に周りの状況に注意を払いながら作

業をしていた。この時、私の頭に「責任」という言葉が思い浮かんだ。学校では、ある程度のことであれば、謝れば許してもらえるが、社会では許されない。働くということは、お金をもらって任された作業をすることだ。お金をもらっている以上は失敗が許されない。こんなプレッシャーのある環境の中で、「責任」を持った行動をしなければいけないのだ。お金を稼ぐというのは大変だと、身をもって学んだ。

職場体験したお店からお土産に、ケーキを持ち帰らせていただいた。そのケーキを家族に食べてもらったら、笑顔で「おいしいっ！」と喜んでくれた。疲れが吹き飛ばす感じがした。働くことは、とても大変だ。だが、お金を稼いで家族を幸せにしたり、感謝されたり、笑顔を見ることで、大変さがあつた分、喜びも増すのだということを私は実感することができたと思う。

私が何か買ってもらったとき、その喜びや感謝の気持ちは、母に伝えていた。母の財布のお金を稼いできた父には何も伝えたことはなかったことに気づいた。これからは、父にも伝えて、少しでも喜んでもらい、働く活力になってくれればと強く思った。両親は自分の服装、趣味や娯楽のためには、お金を使わない。私たち家族のために我慢しているのだと思う。私は、お金のことを、幸福になるための「道具」だと思っていた。しかし、お金は「道具」である以前に、働く人の苦労や努力でできたとても貴重な「結晶」なのだ。

私はそれからお金を大切に使うようにしている。欲しいなと思っても、もし自分のお金だったら、と一歩踏みとどまり、衝動的な買い物は控えるようになった。そして、将来のことを考えた使い方をすべきだと思うようになった。

私はピアノを2歳から習っていて、今も続けている。ピアニストになることは小さい頃からの大きなひとつの夢だ。しかし、本格的に取り組めば取り組むほど費用は嵩む。通常レッスン、特別レッスン、合宿、コンクールとその旅費、ドレス、高価な楽譜などだ。ピアノにお金をつぎ込んでいるため、学習塾には行っていない。だが、将来のためには勉強も決しておろそかにはしない。両立させなければならない。

人生を過ごす上で、お金はどんなステージでも必要なものであり大事なものだ。お金には「お金で測る」という機能がある。確かに世の中にある様々な物はお金で買うことができる。ではピアノに当てているお金の価値はどうとらえ



ればよいのだろうか。演奏力だけでなくピアノを通した人間的な成長がどれだけできるかということで、お金が生きて、価値があがると私は思う。その価値を左右し、決めることができるのは、唯一私だけなのだ。この気持ちを心に刻み込み、日々成長することが、まわりへの感謝につながると私は思う。

